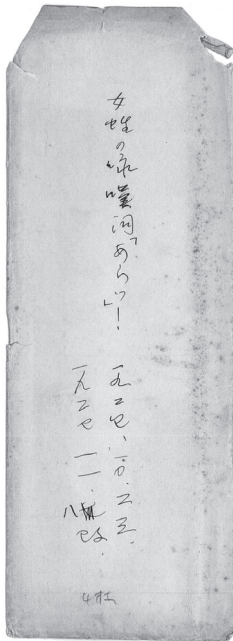


淀野隆三草稿翻刻（下）

棚田 輝嘉・芦木 亜彩湖・齋田 祥子

（上）に引き続き、淀野隆三の草稿翻刻を行う。（上）では、手帳に書かれたものを翻刻したが、（下）では、原稿用紙に書かれたものを翻刻する。用紙の詳細は個別に示すが、それぞれの原稿用紙の種類を見ると、「女性の詠嘆詞『あらッ！』」が寺町御池大和屋製、「猫と鉄瓶」が丸善特製、「光秀の一日」及び「親子」が鳩居堂製である。前二者の封筒には「一九二四」という日付が書いてあるので、三高在学中、後二者は、東大入学後の作と思われる。なお、原稿用紙の場合、ほとんどの拗音は小書きになっていないが、（上）に示した「翻刻基準」に従って、小書きとしたことをお断りしておく。

女性の詠嘆詞「あらッ！」^①



小説 女性の詠嘆詞「あらッ」

——俺は俺の顔に充分の自信をもって居た。頭には自信がなかつたがね。それで居て一度も女につけられたり惚れられたりしたことがないんだ。それで居て人は俺に女て云うものは云ひよれば急ぐほれると例をひいて証明するんだ。



俺はまよふね。むかつともするさ。それで結局、俺の様な男に惚れないのは女が悪いときめたんだ。実際女に審美性と云はず宇宙の万象に対する明が欠けて居るんだよ。なんだい。実際だよ。

——私は前むきだ、これからだ丁度今時分と同じ氣候だったよ。朝が馬鹿に寒くて午後がまるで春のうらら日和の様な秋の日曜日だった。俺は疲れた頭を休めるためと一つは美しい女にヒヨット遇つて、それだけが所謂○を持つて居るのさ。そしてそれが俺を真に価値づける。てな期待をもつてヴェルレーヌの詩集を手にもつて家を出たんだ。

——秋の東山はい、ね。丁度京都女学校の奥の山だった。俺は一かどの詩人にでもなった様に歩いて居たよ。氣の早い樹は紅葉して居て、松とまじつて色彩のあはれ日本の景色をまあひきたて、居た時だ。

——俺は二人の人間が○○の中につくほつて居るのに出遇つたと思へ。その一人はたしかに美しい女だったが、も一人の方がその恋人の男の様に思はれたのだが、俺は無理にもう一人も女だとしたんだがじろじろと見るのなどはかへつて俺の権威にかゝわりひいては俺を考させなくなると思つたからよくも見なかつたんだ。よし恋人同志にしろ二人に同情する様な男なんだ。この時もこの二つの考へが一

共になつてよくも見なかつたんだね。まあ若い男女に恋の甘い時間を与へてやれと云ふ訳さ。もちろん女は俺には氣付かなかつたらしい。俺は女の傍を二間ほど離れて道を歩るいて行たからね。

俺は美しい東山辺を前に見て女のことは一寸忘れたんだ。そしてその次にはヴェルレーヌの詩をよんで居たんだ。そしてその詩をよみ終つてふと我にかへつた時あし音をきいたんだ。

——畜生！やっぱり恋人で俺が切角氣を利かしてだまつて通つて来てやつたのに俺を追つて、むつまじさを見せる心算か。そんな心なら俺にも考へがある、と思つてしばらくは歩るいて居たんだ。俺のことだから女が俺のあとをおつかけるとは考へたくはなかつたからな。

——なんだ外の人だつて。そんなことはない。外に誰れも居ないんだよ。

——追ひかける奴は凶々しくも俺の後一、二間の距離にちかづいたらしいんだ。いよ／＼恋人同志。一体俺をどうする心算か。もうその話し声がきこへるのだ。俺はむかしたんだ。そしたらよけいこゑがきこえるんだ。

おいびつくりするな！その聲は女なんだ。二人ともな。俺の腹からむかつきがはつとどこかへ行つたさ。「俺はさては……。」と思つたよ。俺は女につけられたんだからな。

やっぱし俺にもめぐまれる日が来るんだ。友だちの云つたことは眞実だと俺はこの時確信したよ。俺の自信は俺を陽氣にしたよ。「よしものにしてやらう。大分、シャルマンらしい。」

そう思つたら何時もの様にすましてられないんだ。俺は思はせぶりたつぷりで路をさも詩人らしく歩るいたんだ。一丁ほども来たらう。俺はもうい、だらうと思つた。何故と云ふに、その辺りでは滅多に人に遇ふことはないし、まるで男一人の○の様なんだ。ほかの男に氣がねは要らんだ。俺は今こそい、時とインスピレーションがさ、やいた時にふりかへつて見たんだ。丁度よかつた。女は二人とも道がわるいので下を見て居たんだ。

二人とも素敵なシャルマンだ。そら素敵だつたぞ。この内のどれか一人が俺の恋人にやがてなるだらうと思つた時、そしてその熱い唇を！その手を俺の傍に。こらさううなるなこれからだ俺は俺の胸に穴があいて冷い空氣が背中からぬける様な氣がした。しかも○に、こんな美しい恋人！しめた！

もう少し歩るいて居つてもつと距離が接近した時全身の勇をもつてふりかへつてやらうと思つたんだ。それで又二三十間歩るいた。と丁度い、ことにはもう路が高さ二三間のがけできてしまつて、その崖下には赤土の路がある

んだ。目前の絶壁と云ふ訳さ俺はこの地の利を利用したんだ。俺の胸はドキ／＼して居たよ。きつと女と目があつて、女は目をふせる。俺がつとよる。女の手がでる。にぎるかう思ったから今だと俺はふりむかうとした。その時女のあし音はすぐ俺の三四尺後ろできこえた。

俺はふりかへつた。俺の恋人よ！と心の内でよびかけながら。それにあゝ！

「あらッ！」と云ふのがその追ひかけ手の言葉なんだ。と女はさと身をかへして、もう一人の灯燈マツマツもちらしい女のところへ三四間かけだした。

この時ほど俺はギャフンとやられたことはない。

「あらッ」と人をまちがへた時に出るエツクスクラメーションは剣よりも強かった。「あらちがふわ」その詠嘆は俺の肺腑をぐつさとやった。笑ふな、笑ふな、俺は真面目なんだぞ。

この事から俺は女に対して益々自信を失ふ様になった。——なんだ、その女の恋人に似て居る？馬鹿、そんなことがなにか幸福だ。

(一九二四、一〇、二三)
(一九二四、一一、七改)

(注)

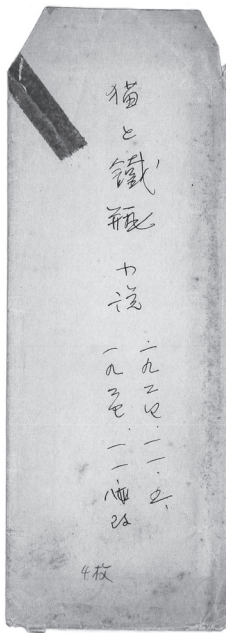
(1) 封筒 表書きペン書きで「女性の詠嘆詞『あらッ！一九二四、一〇、二三、一九二四、一一、八改』。「七」と書いてあるものを線で消し、横に「八」と訂正してある。また、鉛筆書きで「4枚」とある。

原稿用紙 「寺町御池 大和屋製」赤罫 20字×20行
本文 ペン書き さらに赤字による推敲がなされてい

(2) フランス語で「魅力的」の意。Charmant.

(担当 芦木)

猫と鉄瓶



「猫と鉄瓶」

今夜は静かだ。この一週間と云ふものはお貞テイにはいら

お貞はふと目を空想界から目前の鉄びんにひきおろした。「この鉄びんもあの人が買ったんだ」と思ふとそのなり音までがお貞を嘲つて居る様に思へた。

「皆んなよつて笑ふがよい。でも妾はあいつを愛して居るんだから。え、仕方がない」

餘りに弱く思はれたが、事実だった。

実際お貞が夫洋吉に思ひをかけたのは彼女の廿六の時だった。それからもう六年は経った。二人が世帯をもつまでの二年間のお貞はなみ一通りではなかった。廿六までのきな男がないと云つて処女を守り通したお貞が遊び人然たる洋吉に魂を奪はれたことは誰が目にも不思議だった。まして「洋吉を夫に……」と親達に頼むのは、「死んでもいいか」と聞くのと一般だ。案の定親達は「あんなもの！苦勞なしののつべらぼうの遊び屋」と批判した。それでもお貞は遂々洋吉を夫にすることが出来た。それから四年間！鈴を誘ひに来る雄猫よりもっと自分には愛があった。熱もあつた。雄猫は一週間ほどでもう鈴に通はなくなつたが、自分は親たちの鼻をあかすために、二年と云ふ年月経済上の独立のために色々と苦勞した。結局親達は財産の三がーをお貞に譲つてはくれたが、あの時の苦勞は四年の結婚生活では報ひられない筈だ。愛するものにとつてなんとあはたしくみちたらぬ生活であつたこと。

「でもあんまりと云ふもんだ」と過去からお貞はさめた。喉ふりもいつか止んで時計と湯のたぎる音のみがお貞を嘲つて居る。

「鈴！鈴！！」とお貞は三十女のヒステリイで叫んだ。でも答へるものは折からの家造りのミシ／＼云ふ音ばかりだった。

二

すてられてから一月もたつ。鈴の身重が目につく様になつたのに夫からのたよりは一度もない。お貞にはうずくほどの物足らぬ一人ねの夜とヒステリイが増すのみだった。

鈴は、今は通つて来ぬ雄猫のことも忘れた様に、それも腹の仔をいたわる様に温い所をよつて歩いて居る。

そして女主人が近寄るとぬつと立つて胡散などならみながら立ち去ろうとする。

「畜生！」とお貞は手にもつて居るものをなげる様にふつた。それでも鈴は女主人のヒステリイや心配には無関心、只仔猫の安産を祈つて居る様だった。

夫から手紙が来た。

「お前とはすいた仲だったが今の女がもう一枚い、お前と一共になる時も、い、女と離れたのだ。だからお前と離

れるのも己にしては実跡だ。今の女と仔をもった。所などお前に云ふ必要はない。たゞお前にこの手紙は三行半の役をつとめればいゝ。そしてお前の記す嫉妬はつまり手切れの金代りだ——

と云ふ様なことが書いてあった。

つとお貞は無意シキに流しに下りた。次にはテバ飽^マ丁で手紙を組板の上でずた／＼に叩き切った。彼の女はテバを右手に、左手に手紙のきれぎれをつかんでなんの目的もなく裏口に出た。その時彼の女の目に鈴の二つの目が照りつけた。暗夜の墓場の燐光の様に、しかも幽霊的でなく生々とした燐光の様に。お貞はかつとなつた。

「畜生！」と云ふこゑと共にテバは飛んだ。キヤツとニヤツとの中間の悲鳴をあげて子持ちの腹はうちさかれた。奥がさつとほとばしると、子ぶくるがぬらと出た。親はあけに染まりながら数個の生命をつゝむ子袋と、お貞の目と、愛と、呪ひとをなげかけながらあえいだ。お貞は像にくづおれる様に腰をおとした。その時にも白昼前裁に燐光の目がひかつて居た。(一九二四、一一、五)

(注)

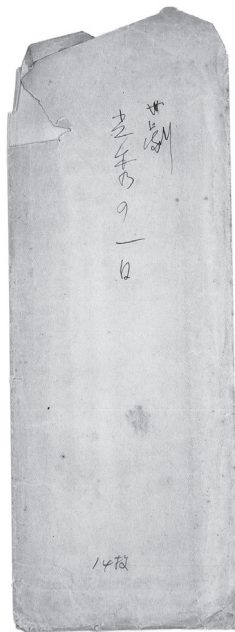
(一) 封筒 「猫と鉄瓶」 小説 一九二四、一一、五、
一九二四、一一、八改」とペン書き。さらに「4枚」と鉛

筆書き。

原稿用紙 「丸善特製 二」 茶罫25字×24行 本文ペン書き、さらにペンによる修正と、鉛筆による修正がある。

(担当 齋田)

光秀の一日^(一)



(新時代劇) 『光秀の一日』

(時) 天正十年六月一日酉の刻前後

(所) 丹波国亀山城付近の東の柴野の松林の明智の仮陣所

(人) 明智日向守惟任光秀

明智左馬介光春

(下手)

明智次右衛門尉光忠 (光秀の二女の婿)

藤田傳五

齋藤内蔵助利三

溝尾勝兵衛尉茂朝

(新時)	代(新)	天正十一年二月一日	西の刺鳥渡
(時)	天正十一年二月一日	西の刺鳥渡	
(所)	内渡石山陣付近の東の柴野の松林		
	明智の陣陣所		
(人)	明智の向井佐十郎光秀		
	明智左馬介光春	(光春)	
	明智次右衛門尉光忠		
	藤田直忠		
	藤原内藏助利王		
	溝邊勝兵衛尉光茂		

(備系)	天正十一年二月一日		
	西の刺鳥渡		
	内渡石山陣付近の東の柴野の松林		
	明智の陣陣所		
	明智の向井佐十郎光秀		
	明智左馬介光春	(光春)	
	明智次右衛門尉光忠		
	藤田直忠		
	藤原内藏助利王		
	溝邊勝兵衛尉光茂		

天野源右衛門

(情景)

舞台は下手に低く上手にや、高き一面の赤つちの松林。上手と中央と下手や、中央よりとに太き松の木あり。その松以外は適当に配列すべし。後景は下手よりに龜山城の遠見。右手林の間より五本桔梗の明智の旗指し物、のほりなど見ゆ。舞台より半間前方に明智の一万三千の大部隊止まれる心。上手よりや、高き土地將凡を置き、その前に虎の敷皮をしく。石―こけむした―を適当におく。(下手に)、光秀は虎の皮の上に。光忠、傳五、勝兵衛の三人はこれに對して真近く坐つて居る。すべて東の柴野明智光秀陣所の体よろしく。静かな中に幕あく。

光忠 殿の御胸中お察し申します。拙者等三名必ず殿の御宗に背きはいたしません。

のう 藤田。(と藤田を見る)

如何にも。私も身命を投げだして戦ひます。

勝兵衛もなう。

光秀 (平伏して) いかにも承引いたしました。

勝兵 もう光春等が来る刻限だ、三人とも退いてよいぞ。

光秀 (三人各自礼して立つて)

用あるときは大声でよぶから必ず注意ある様。且見

張りをいたしてくれ。

光忠 承知いたしました。(三人皆上手後景の松林に入る姿見えずなる。それは少し向ふがくぼんで居るから)(上手より) 光線にて、夕日の照り映ゆるを示す。亀山城も、旗さしものもあかねに染る。)

光秀 あ、亀山の城が紅に染まって居るは。この日が東天にかゝらぬ時、俺の望みも…

沈黙

まだ来ぬのか、(将凡にこしかけ軍扇を膝につきて考へに耽る。その顔には決心の色がある。静かに上手前よりのところから明智左馬介光春と内蔵介利三とが出て来る。光秀は顔をあげて待ち設けたと云ふ体で二人を自分の前に坐らす。)

光秀 軍勢の様子は？

光春 遅刻いたして相すみません。人馬訓練ことごとく行きとどき、三段の備へすべて一万三千でございます。

光秀 (満足して然もその満足の裏に暗い影がある)

大儀であったな。この勢で中国へ下れば高松の城も毛利勢もまた、くひまぢや

利三 如何にも。もう戦は味方のものでございます。羽

柴殿もことの外の御よろこびでございます。

光秀 さうであらう

ト答へたが急に暗き面になり、二人は光秀の面をみて驚く、

光春 殿、御顔色が悪うございますが、御気分は？

光秀 心配いたすことでもない。気分は清々じゃ(ト益々その面色は暗くなり、苦痛の色歴々と見ゆ)

ト耐えきれずに

二人に願があるのぢや。…(間) 二人の生命を今光秀が貰ひたいのぢや。

兩人驚く、二人とも光秀を凝視する。光秀との視線が会つて、男の氣と氣とが戦つて居る。

光春 (急ぐに) 中国征伐の援軍としての今日の出陣、何で生命が惜しうございませう。

利三 光春殿も坂本で、二十六日に御一家の人々と御盃を交はされましたに。私とても同じことでございます。

光秀 死んでくれるか、きつとじゃなあ。

光春 たとひ毛利の軍勢が如何なる秘略を用ひやうともこの生命のあらん限り戦つて死にます。必ず君の御ため

には生命は投げだして見せませう。

光秀 よく云つてくれた。俺は二人の生命をたゞでは貰はぬぞ。

利三 とは何でございます。(二人光秀を見つめる、光秀

光秀 是将凡より虎の敷皮に下り、二人を真近によせる）二人にもう一つ願ひがあるのぢや。俺はお前達に云ひかねた。しかし今となつては事は急だ云はねばならぬ。よく聞いてくれ、俺は土岐の流屬から右府殿に取り立てられて三千石から廿五万石の大名になつた。お前達もよく知つて居ることぢや。皆右府殿の御影ぢや。俺はよう知つて居る。恩は山より高く海より深いと云ふことは。しかも俺は：俺は（決心したる如く）右府殿の御生命を申しうけたいのぢや（二人はつと驚く、光秀制してあたりに氣を配り）二人とも存ずる胸をこゝで云ふてくれ。

光春 何と云はれます。

光秀 若し二人とも反対ならこの光秀の生命をとつてくれ。この願がかなはぬならもうこの世に生きて何の甲斐があらう。

光春 ヤ、沈黙、光秀は二人を見まもつて居る。二人は伏して考へにふける）
殿！又何として。

光秀 （かぶせる様に）俺は御身達と同様に右府殿の御恩を被つて居る。御身達が俺と共に暮して居るのも右府殿の御影ぢや。その位のことのわからぬ俺ではない。俺もそれだから右府殿の御前には○して来た。

しかし俺は右府殿に重用せられればせられるほど右府殿の心の中が不案内になるのぢや。俺の心には右府殿を離れようとする心があるのぢや。（間）

廿五万石を賜はつた俺は大名ぢや、それに何ぞや大名達の満座で俺は右府殿に嘲弄された。大名を取扱ふ上の態度はどうだ。まるで犬ころでも扱ふ様ではないか（熱して来ると）利三。御身を稲葉一鉄から抱へた時でもどうだつた。あの乱暴な怒り様、俺が立派な臣を召抱へることは右府殿のためぢや。惠林寺の快川国師を（佐々木次郎のことで）焚死せしめたあの残虐さ。俺があれば御諫言したのに津田と長谷川を遣して廓門から山門へ籠草を積ませ生きながら焚死せしめたではないか。（その時のことを思ひ浮べて目に見る様に頭をあげて、二人の頭の上方の空間を見まもる）戦と云ふと焼討ぢや。みな殺しぢや。浅井下野、浅井備前殿の首級を薄濃ウツクミにして、天正二年の正月の酒の肴にしたではないか。人の首級を。なんと云ふ浅思なことぢや。あまりに残忍だ。近い話が此の間の徳川殿の接待の時の俺の無念さも御身達も知つて居よう。俺が心をこめて作つた料理も足蹴にされたのぢや、その上急ぐ中国へ下向せよとぢや。俺は右府殿には終まで仕へられない人間だ。

いつか右府殿が俺を害せられることは火を見るより明らかぢや。佐久間を見い、林左渡守を見い、荒木村重もあの通り滅却されたではないか。俺は登れる位まで上ったのぢや。もう俺の右府殿による運命は終りぢや。俺はいつかは害されるのぢや。(右の句の間二人は適当に、驚き、又とゞめんとする態度をするが光秀がつゞけてしゃべるのでとどめられない)

光春 殿。その様なことを。

光秀 (さへぎって) 俺と右府とはこれ切ぢや。丹波近江を森蘭丸に与へると云ふことも聞いた。しかも三年の後にぢや。未だ我が手にくだらぬ雲州や石見を、貫つてなになる。俺も荒木の輩と同じく滅せられるのは定ぢや。

利三 殿、それは只噂でございます。殿、右府殿に害心がございますれば、何うして百騎足らずで本能寺に館せられませう。殿。この儀だけは。

光秀 右府は俺の臆病を知つて居るからぢや、あんな奴に何ができるかと高をく、つて居るからぢや。荒木の一族の殺され様。あれと同じ運命がこの明智一家に襲ひ来か、つて居るのぢや。右府は悪魔ぢや、残忍な悪魔ぢや。俺は悪魔になつてやる。高をく、つて

居る奴等に一泡ふかせてやる。

御身体は俺を憐んでくれないのか。もう五十の坂を五つも越した俺の思ひ出を助けてくれ。あはよくば………。憐れんでくれ。

光春 殿！弑虐を敢てして王者になつたためしはございません。殿このことばかりは。

光秀 (かぶせる様に) いや、愛宕の神に誓つた俺の願いは石よりもかたい、金鉄だ。一万三千の軍勢は出陣を待つて居るではないか。よしと云つてくれ。云へねば俺を殺してくれ。瓦となつてこの身を○ふせうより玉となつて砕けたいわ。神かけた俺の願ひを……。

光春 では愛宕の神とわれ等の外には知る者としてないと仰せられますか。

光秀 (少したじ／＼となるが気をひきしめて)

いや。俺はお前等の反対をおそれ居た。俺は光忠にも、傳五にも勝兵衛尉にも洩らしたは。俺の勝戦を祝つてくれたは。

利三 (ハットして) それではすでに。

光春 三人は承引いたしたのか。殿それはあまりでございます。

光秀 いや三人の非ではない。俺が無理に承知させたの

ぢゃ。俺が無理に誓はせたのぢゃ。俺は卑怯者だ。
(や、長き沈黙。あたりはだん／＼と暗くなって来
る。軍のざはめきがきこえる)

光春 (意を決して、苦しく) 殿。是非もございませぬ。

齊藤殿、殿と共に京師へ。

利三 光春殿！是非もない。

光春 さいてくれるか。辱けない。かたじけない。それでは急ぐに軍略を。二人頭をさげてしばし無言。光秀立ち上り、高きところに登る、兩人その方を見る。

光秀 (さしまねく) 急ぐ参れ。

声 はつつ。只今。(遠くで)

光秀 将凡にかへる。二人光秀をみる。三人とも緊張して居るが光秀にはや、つと云ふ氣分が大部ある。三人、先きはいったところから急いで登場。三人一礼して二人の後に坐す。光秀二人を左右に坐らす。三人は前にでる。お互ひに緊張。この間捨白、様子よろしく。

光秀 三人とも近うよれ。二人とも承引ぢゃ。

光忠 光春殿！殿の御名でわれ等三人の僭越を許して下さい。

い。……(間)

光春 いかにも。此の上は五人が一つになって。

利三 殿を御助けいたしませう。

光春 殿、事は急でございませぬ。今宵直ちに出陣して、明日未明に本能寺を。

日未明に本能寺を。

傳五 息もつかずに妙覚寺を。

溝尾

光秀 さうぢゃ。されど桂川までこの事は…。只右府公に

謁すると云へ。傳五、天野源右衛門をよべ。

傳五を立ちて、先き光秀がのぼりしところに行きよぶ。

光秀 (傳五のかへるを見て) 桂川を渡れば「本能寺へ、功あるものには重賞を」と光春大声によんでくれ。それまでは中国へ……(天野の来る足音でやめる)

天野 ハッ。何か御用で御座りますか。

光秀 今度の戦は右府殿の直命によつて羽柴殿を援けるのは御身も承知の通り。そこもとは先手なれば、常に乱れない様注意が大切ぢゃ。今度の戦はぬけがけは許さぬぞ。若し乱れたり、ぬけがけするものはどこでもい、切つてすてい。乱してはならぬぞ。一人でも軍より先きに行くことは相許さぬぞ。

天野 承知いたしました。

光秀 ゆけ。(天野退場)(間)

光秀 光春、御身は先陣だ。○の坂を左へ。東せよ。軍兵

が何と云はうと只東せい。い、か。

光春 はつ。

この時出陣の鉦太鼓なり、ざはめき立つ。
六人一せいに立上る。鐘は幕の下りるまで鳴る。

光秀 光春はじめ皆の者よいか。必ず立派に。

光春 最早や勝戦でございます。

利三 天下も今に。

他の三人 我が殿のものに。

光秀 敵は本能寺ぢや。さあ！

(六人は光秀、光春、光忠、利三、傳五、勝兵の順
に先きの天野の行つた道に歩きたすと幕。

(備考。)

このシーンの三十間か一町むかうに一万三千の人馬あればこの劇の間に時々、適当にざはめきの反響位を入れねばならぬ。沈黙のあととか、緊張のあとに必要なだ。旗さし物もうごく奴をこしらへねばならぬ。

一九二四年二月十六日

一週間の光秀研究の後に書く。時代ものの処女作。

(注)

(1) 封筒 表書きペン書きで「○劇 光秀の一日」とあり、さらに鉛筆で「14枚」とある。

原稿 鳩居堂 四〇〇字詰原稿用紙(赤罫) 十三枚。

別に作品用メモを記した「京都帝国大學工科大学」

と印の押してある手帖の一片分がある。

メモの内容は以下の通りである。

天正十年五月

十五日 家康安土到着、中国出陣の命光秀に下る、

十七日 安土より坂本に帰城、

廿五日 坂本出立、龜山着、

廿六日 坂東より龜山城、 信長公記、

廿七日 愛宕山佛詣、一宿致〇〇籠

廿八日 西の坊にての発句興行、

廿九日 信長安土城 出立後京師に入る。

三十日

三十一日

朔日(西の刻六時) 内蔵〇一万三千

六月二日 午前八時(五つ) 本能寺討入。

*なお、廿五日の日付は見せ消ち。また、午後六時は西の刻だが、西に「いぬ」とルビが振ってある。

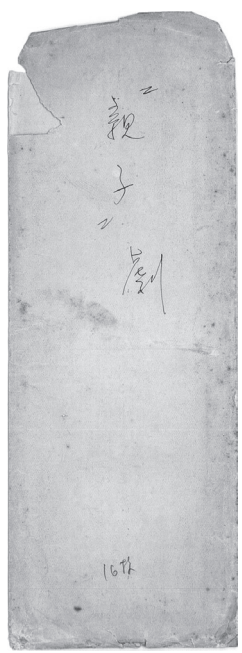
(2) 漆で固め、金などの彩色を施した物のこと。信長が朝倉左京大夫義景、浅井下野守(久政)、浅井備前守(長政)の首を金で彩色し、それを肴に酒を飲んだと「信長公記」に伝えられている。読みは「ハクダミ」が正しいが、「ハ

グタミ」とルビが振つてある。

(3) 京都のこと。

(担当 芦木)

親子⁽¹⁾



A

一幕親子

古海敬子 五十一才 二十四才の時離縁され、恭一

を拾ふ。

々 恭一 二十七才 文學士で青年画家、画壇から

独立して居る。美術學校の青年教師。(洋画)

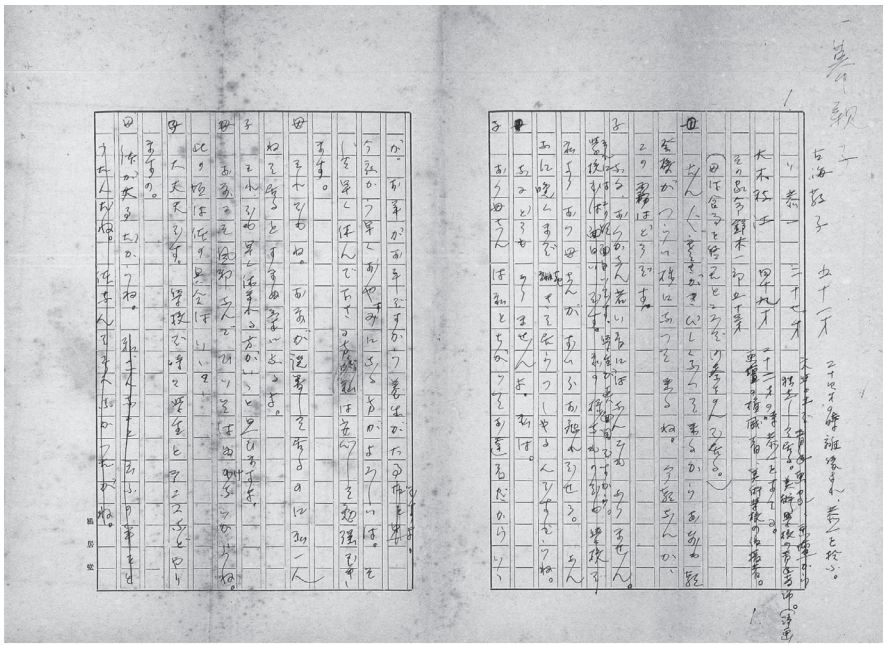
大木秋江 四十九才 二十二才の時恭一をすてる。

画壇の権威者、美術學校の後援者。

その家令鈴木一郎 五十三才

(母は食事を終ったところで御茶をのんで居る。)

母 だん／＼寒さがきびしくなつて来るからお前も朝登校



がつらい様になつて来るね。今朝なんか、この霧はどうです。

子 なに、おつかさん若い者にはなんでもありません。それに學校はこの頃面白いです。學生が眞面目ですから。私よりおつ母さんがずい分お疲れでせう。あんなに晩くまで起きて居らつしやるんですからね。

母 なにどうもありませんよ。私は。

子 おつ母さんは私とちがつてお達者だからいゝが。お年がお年ですから養生が大事ですよ。

今夜から早くおやすみになる方がよろしいは。そして早く休んで下さる方が私は安心して勉強できます。

母 それでもね。お前が讀書して居るのに私一人ねて居るとすまぬ氣になるよ。

子 それでも早く休まれる方がいゝと思ひますよ。

母 お前こそ風邪なんぞひいてはゐけないからね。此の頃は体の具合はいゝ？

子 大丈夫です。學校で時々學生とテニスなどやります。体が大事だからね。

母 (はしをしまふ) 御馳走さんでした。

母 よろしうおあがり。

あ恭一 十五日はお前の誕生日だね。

恭 ほんとにそうですね。月日は早いものです。三高を

でて、大學に入ったのがついこの間の様に思へますが。私も二十六になつたんですね。

母 早いものだね。二十六だね。(感慨深し)

恭 (立ちあがつて洋服を着かへ始める)

母 着物はそのまゝにしてお、き私がかたづけけるから、おくれるといけないから。いゝよ。私がするから。(膳をかだづけはしりに洗ひ物をもつて行く。)

恭一は洋服をきて、机の前でしばらく感慨深き様子)

恭 (洗ひ場に氣を配つて) 二十六年になるのか。早いとは云ふもののどんなにおつかさんは……………。

母 登場

母 お前へさあ早くおいでよ。おくれるといけないから。

恭 はい。おつかさん今日は九時からなんです。一寸絵の具屋へ寄つて行かうと思つてますので。

母 あそうか。なんと云つても絵の具が大切だからね。それはそうとお前お小遣いはあるかい？

恭 え、あります。この間のが、そのまゝ、ありますから四五本は大チューブが買へると思つて居ます。ほしいのは三つですから大丈夫です。

母 足らなきやお云ひよ。いゝか。

恭 え、大丈夫です。

おつ母さん、絵の具はきつと来て居る筈なんです。から、

今日中にあれを仕上げる心算りで居ますの。

母 あ、そう、早かったね

恭 この頃は気分が素てきなんですから案外早く仕上げられました。

母 あれの完成と誕生日と一共にお祝いしましょう。なんしろ二回目の大作だからね。洋吉さんはなんて云つてられたの？

恭 一回よりいゝと云つてくれました。画壇と云ふものから一步も二歩もすゝんで居ると云つてられました。

母 そうかえ。お前もうれしいだろう。あの人の批評は慎重なものだからね。お前も洋吉さんの御名譽を傷つける様な作ではだめだからね。洋吉さんはお前の只一人のえらい理解者だからね。

恭 ほんとにそうです。お母さんと洋吉さんが私の肉体と精神みたいなものです。

母 おしべりしすぎました。さあ 行つておいでよ。

恭 (靴をはきて) ちゃ行つて来ます。

母 行つておいで。(戸の外まで見送る)、

恭 一下手に退場。家に入りて、洗ひ場に行く。舞台空虚(ま) (しばらくすると下手から家令を伴つた画家大木秋江が礼装で出て来る。二人の顔には陰氣がある。ことに大木には。そして古海家の戸口で二人とも声をかけるのに

躊躇する。

家 先生 たしかこゝでございましたね。

大 さうだ。そこだ。(戸口から内を窺ふ。人氣が無いのに不安になる)

家 (はげます様に) 先生私が御挨拶いたしませうか。

大 いや私がしなくてはいかぬ。私がおだづねしよう。(またはいりまどふ)

母 はしりより室に入り来る。あたりをかたづけ縫物をもつて来る。

大 (思ひきつて) 御面下さい。御面下さい。

母 (不安の思入れ) どなた様でございます(戸をあける)

大 私大木と申すものでございますが、古海さまは此方様でございますね。

母 あ、大木様、あの美術學校の。はい古海でございます。

何か御用で。さあどうぞおは入り下さいませ表口ではなんですから。まあむさくるしいですが。

大 はい是非お話したいことがありますので。それでは失礼いたします。(両夫中に入る。母戸を立てる)

母 さどうぞと(玄関からローカに出て奥に案内し)(ふとんをすゝめる)どうぞ御遠慮なく。

大 初めてお目にかゝります。大変突然あがりまして。

母 いえ此方こそこんなむさくるしいところをようこそいらつして下さいました。定めしうちの恭一が色々々と御厄介になって居ることをごいませう、母から厚く御礼いたします。

大 いえこの方こそ學校の爲めに古海君の御精に感謝しなければならぬのです。(この会話のうちに暗きかげ大下の顔に表はる)

母 して大下さま 今日御用件は、突然でございませうか何か學校の方のことでございませうか。

大 (無言)

家 (見かねて) はい、ほんとうに突然でございませうが、あのご息様のことでございますが、

母 え、では恭一について何か不都合でも？今登校したばかりでございまして残念でございます。

家 いえ、どういたしましたして。きつと登校になつたらうとは思つて居りました。學校のことではありません。私的事でございまして。実はセン越ではございませうが(大下を見る)

大 (お前は、と云ふ思入れで) いや、奥様私からは是非お話ししたさねばなりません、いや心から私はあなたと恭一君にさんげいたさねばならぬのです。

母 (え、ではとの○にならいますと?)

大 (思ひきつて)(力なく)だしぬけでございませうが実は私は恭一の実父でございませう。

母 そんなことをあなたあまり突飛ではございませうか、何かしつかりしたよりどころでもあつてお云ひになるのでございますか。あれは私の子です。廿六年も共に住んで居た私の子です。

大 いや、奥様お信じにならないのは御もつともでございます。私として今更虫のい、話しかも知れませぬ。申しあげねばなりません。奥様どうぞ信じて下さい。今から廿六年前の丁度今日の十五日でございました私と妻とで恭一を生後五日の恭一を私は今でも覚えて居ます。この衣と同じ着物につゝむで、同じ模様のおとんにくるんで鎮守の神前にすてたのでございます。(衣をだす)その時『私は今修行中だからやがて画壇の中心になつた時きつとたづねてくれ』と云ふ意味の手紙をそへておきました。

母 あんぜんとして居る。家令も。

私は恐ろしい悪魔でございました。私は藝術への精神を名として生活のために愛児をすてたのでございます。その当時妻はまだ娘でございました。世間の手まへ母となることができなかつたのです。私は實際恐ろしいことをいたしたのです。私は今更私の罪をまかへりみずよ

くこんなことを云ふ様になつたもんです。どうぞ許して下さいませ。信じて下さい。

母（無言で衣をみつめて居る）

家 奥様、先生のおっしゃることにはうそはないのでございます。どうぞ信じて下さい。

大 恭一と云ふ名もその時手紙につけておきました。私は私の半生をたとひ藝術に於て成功いたしましたとは云へこの暗い思出で苦しんで来たのです。あれが若手画家として洋吉君に認められ、同じ関係ある美術學校で教員をして居るのに私が知らなかつたのは罪の呪ひです。私はむとめ(6)ました。しかし二十年の間も一寸も知れなかつたのです。どうぞ奥様信じて下さい。洋吉君には直接話しませんでしたがこの鈴木が（鈴木礼をする）充分調らべてくれたのでございます。前の御住ひの隣りの方々にも聞きましたので。沈黙^{アタ}）

母（衣を下において）お話しはよくわかりました。あなたの御せのとほりでした。たしか、この衣でした。手紙もありました。しかし私は（泣く）しかし私は廿何年間二人でたかたかして来たのです。それを今（泣く）

大 ほんとうに今更ら私は利己主義です。しかし私は過去の罪が恐ろしいのです。私の精神の上に大きい暗いかげをなげて居るのです。それに同じ學校で同じ藝術の道に

入る人を導いて行かねばならないのですから。このまゝでは私は死んで居るのです。實際勝手です。只親子と云ふことでこの事を是非お願ひいたします。

母 あなたのこともよくわかつては居ます。しかし私は恭

一の母です。この世で只一人の私の恭一は生命でした。恭一が居てこそ私は生きてられたのです。恭一と私は離れられません。私は私は（泣く）

あ、然しあなたは実父さまですね。（泣く、や、ありて）よろしくございます。私は恭一と今まで暮したことを思ひ出にいたしませう。私は決局只一人の人間なのでございます。

（大下も家令も泣く）

しかし恭一も子供ではありません。私は一応恭一にこの事を話さねばなりません。ことにあれは考へる方ですから。

大 ありがたうございました。あなたの御一言で私の過去は今かゝやいて来ました。ありがたうございます。感謝いたします。定めて病氣の母もよろこぶことでございませう。

母 では母様もおいで、ございますの、そして御病氣で。

大 はい、同じく苦しんで居ます。せめて一度でも話させてやりたいと思つて居ます。強度のヒステリーでもう狂

氣に近いのでございます。

母 さ様でございますの。お二方おそろひですのね。早く知らさねばなりません、……あれは孤独の人間になつてしまつて居ます、ことに今日仕上がる大作をか、へて居ますので今急ぐにこの事を話すことは、どうか今夜まで御待ちを願ひたいのでございますが。

今日は彼の誕生日ですしそれに大作の完成とのお祝ひをいたさうと思つて居るのでございますから。あれにゆとりができてから話す方がい、かと思ひますから。

大 恭一の性格は私も洋吉君からもき、自分でも今まで見て来たので只あなたに御願するより外はありませんのですからどうぞよろしく御願ひいたします。

家 私からも御願ひいたします

(この白の中に恭一表に小走りにかけて来り、片方の靴をぬぎ、下駄を見て不審の思入れあつて、母をよぶ。

母はできる丈と云ひて恭一をき、つけ、

母 (客にいそいで) 一寸失礼いたします。

客二人よろしく挨拶。

ト急いで玄関に来る。

恭一は靴をぬいで居る。

母 恭一なんですかの？いそいで帰へつて来て。

恭 お金を忘れたんです。折角絵の具やまで行つたのにお

金がボケットにないんです。

母 ぢやお前私がつつて来てあげる。お待ち。

恭 (母のかほを見て) い、え私がとります。よろしい。(とあがる)(母の様子と下たとを思ひあはせて) おつ母さま誰かお客ですか。めずらしいですな。洋吉さんは来るはずはないし。

(兩人次の室に入る)

恭 (机のひきだしをあけて財布をだしながら小聲で)

おつ母さん顔色がわるいですよ。お客は誰れです。(母によつて来る 母は玄関の方へ来る)

御心配を自分一人でかくして居られてはいけません。

誰れです。

母 誰れでもありません。一寸私の知合ひの方ですよ。

恭 知合ひの方でそんなにおつ母さんに心配をかける人は誰れです。ない筈です。私が会ひます(と奥に行きかける)

母 (決したるが如く) 恭一、大下さんです。一寸御用で来て居らっしゃるのです。何でもありません。

恭 知合ひだつて、それごらん下さい。私が会ひます。おつ母さんに心配をかけるなんて、大下さんも大下さんだ。よろしい会はして下さい。

母 これ、一寸こつちへおいて(と決したる面持にて、玄

関にもどる)

恭 一体なんです。心配はない筈ですのに。

母 よくきいておくる。どうせ一度は話さねばなりません。

私はお前の作の完成のためにのばそうと思つて居ましたが、云ひます。ほんとうの両親がわかつたのです。大下さんです。

恭 なんですと。私の生みの父ですつて。(強く、)

え、私には外に両親なんてありません。あかあさんあなたが私の母です。父は死んだのです。あなたをおいて外に母がある筈はないのです。

母 お前。そんなことを云ふものではありません。お前の真との母で私がないことは知つて居るだらう。

恭 え、それや知つて居ます。お母さん私には母はあなたより外にはないので。私はどんなことがあつてもあなたから離れはいたしません。

母 それではお前……。おつ母さんはね、お前を思ふから云ふんだよ。そら私だつてお前と別れるのはつらい。お前は私の子だ。今迎いに来た父親は私はあまり虫がよすぎるとも思ひました。けれど親子は虫がよすぎるとか、なんとか云ふこと以上なんだからね。お前冷性になつて考へておくれ。人間の心の○の奥からであるお前のことはをおひいでないといけないよ。い、かい。

恭 おつ母さんだめです。私はとつくに決心して居るので

す。私を生れ落ちるとすぐに捨児にした者がなんで親です。

(この時不安のあまり鈴木が飛んで来て、恭一に挨拶す。母と恭一との会話の間は奥の二人は暗い不安に襲はれて居る。)

猫でも親は子を育てます。私は決心して……

家 どうぞ古海様おしずかに願ひます。

恭 決心して居るんです。あなたは誰れです。

母 この方は鈴木さんと云ふ大下さんの支配人です。

恭 そうですか。よろしい。私は大下さんに話します。

母はついで次の間まで来るが、そこに坐つて机による。

鈴木は母と、大下に両方氣を配る。よろしくてなし○るべし。)

恭 (冷静に、客間に)大下さんですか。失礼いたしました。

秋の展覧会から御目にかゝりませんでしたね。

大 (暗い表にて、しかし話したえられず)恭一、私を許してくれ。

私はお前をすてた父です。

恭 何を仰しやるのです。おつ母さんを心配させないで下さい。

私には父はないのです。よしあつたにしたらところで帰

へりはいたしませんし、父ともよびたくはありません。

大 そう云ふのはもつともだ、お前の云ふ通り猫でも子を育てる。許してくれ。頼む、

恭 許すも許さぬもありません。私に父は必要ありません。

母のみがあればいいのです。今更私に、私はお前の父だと云った人があっても それは父ではありません。私はこの母に、この母の手一つで一つから廿六の今日まで育てられて来たのです。私の母は針一本で私を今日にしてくれたのです。中學も高等學校も大學も、それに私に絵をも書かしてくれました。私を今日の様にしてくれたのは母です。私を生んでくれた親は親ではありません。この母のみが親なんです。

(母来りて)

母 恭、お前何を云ふんですか、私の云ふことがわかりませんか、お前は私の云ふことをきいてくれませんか。

恭 おつ母さんだまって居て下さい。この事のみはおつかさんに背きます。きかれません。私は冷静です。

あなたではありませんか、(泣く)私に独立を教へてくれましたのは。私は決心して居たのです。私には父はいりません。ないのです。

大下さん私は母がなんと云ひましても父のもとには帰へりません。父ともよびません。大下さんよく御承知を

願ひます。私はこのまゝでこそ強くなれるのです。私の藝術に力が生まれるのです。人間を見ることが出来るのです。おつ母さん泣かずにおいて下さい。

大 許してくれ。只一度でいい、帰へってくれ。父とよんで呉れなくともいい、只母に会つてやつてくれ。死にのぞんで一言わびを云はしてやつてくれ。俺たちは呪はれて居るのだあ。(泣く)

恭 決心はくだけはいたしません。おつ母さん泣かないで下さい。恭一とあなたと二人でいいのです。

大下さん、母が心配しますから、おひきとり下さい。私には父がないことを呉々も云つておきますから。勿論外に母がある筈はないのです。大下さんおせかしたいしませんが。

母 恭！これ。

恭 だまって居て下さい。云はずに居て下さい。

大下さん。

大下はかなしき思入れで

大 全部は私の罪の故です。古海さん(泣く)大麥御心配をかけました。では失礼いたします。

ト消然とで、行く。家令もあいさつして続く。(間)

母 お前！あゝ、よくまあ父様を、

恭 許して下さい。私は苦しいです。私はそれでも考へた

のです。(決心したる如く) おつ母さん。それをとどけて下さい。(ト机から写真と三冊のノート^マをたず)

せて母に見せてやって下さい。そしてノートには私と云ふ人間が書いてあります。どうぞ、

母 お前！(両人顔を見合す。母立ちて行く、恭つ、ぐ戸の音、

恭一机へかへりさめぐと泣く。

しずかに暮。

(*最終原稿欄外に「六月七日——十日」とある)

B

欄外・子 恭一の真の父二六年前に捨子をし父、今は立派

な画家

古海家

母一五一才

子一恭一二六歳…青年洋画家

幕あく^マと母と子と二人で食事をして居る。そして食事はもう大分終りに近かづいて居る。

母 恭一 毎晩おそくなるからずい分ねむいだらうね。

恭一 え、ずい分、ねむいですね。今〇〇きのさかりなんで

すから起きにくいですね。しかし母さんは私よりもっと疲れるでせう。毎夜々々晩くなりますしね。

母 私なんか頭をつかふことがないからお前の様にねむくはないよ。しかし年がよったのか、すぐお仕事が肩に来るもんだからね。……やりきれないね。

ほんとに私ももう年をとってしまひましたわ。

恭一 おかあさん、もうあなたは働かにならないでもい、のです、私が今からは一人で働かにならないんですよ。あんなに学生時代に遊んだんですからね。

母 ほんとにそれはさうとお前も身のかたがついてくれたので一安心はしたよ。しかし人間は遊んで居ても一寸も面白くないからね。

恭一 それはさうと明日はお前の誕生日だったね。

恭一 そうですね。私ももう二十六になつてしまひました。あの時からもう二十(はつときづいてよして止む)。よろこんで下さい。誕生日までにきつと今のやつを仕上げたしまひます。もうすぐなんです。

母 あ そうだったね。それはい、よ。あの絵のお祝いと共に二人でお前の誕生日を心から祝ひませう。

恭一 ありがとうございます。母さんと二人で祝ふのがほんとのお祝いですね。……沈黙……

それはさうともうおそいですから行って来ます。今日

は九時はじまりなのですが、一寸道で絵の具屋へ行きたいものですから。

母 そうですか。何時頃に帰りますか。

恭 今日マはきばって書かねばなりませんから早くかへるつもりですが、まあ二時にはきつと帰ります。

母 それからお前絵の具屋へよるとお云ひだが、お小遣いはありますか。

恭 御心配は入りません。この間頂いた小遣いがそのまゝ、ありますから、二三本は充分かへます。

では行ってきます。

母 (送って行って) では行っておいで。

恭 行って来ます (下手退場)

(母はもとの座に帰り、あたりをかたづけ洗ひ場を持って行く。) 暫時舞台空虚。

この間下手より羽織、袴の中老紳士が家令と二人出て来る。紳士は中老と云ってもまだしつかりして居る。壯者を凌ぐの概がある。家令は心のよさそうな老人。

家 先生 この御家でございますか。

父 そうだ。この家だ。(かど口に乗りのぞきこむ、人の氣なし。)

C

ほど私は自分が悪まであると感じ、この過去の罪を浄めるのは古海家の御方に―あなたと御息とおすがりするより外いたし方がないと思ったことはありません。私は今私の罪悪を浄めなくては私は生きながら死んで居ると同様だと思ひます。そしてそれ以上に私の生死は別としまして、古海様に詫び恭(はつとして云はず)いや御息さまにも御詫びをしなければならぬと思つて、あれの誕生日の今日私は思ひきつてまゐつたのでございます。どうぞ私の罪をゆるすと…………。

どうぞ。

母 よくわかりいたしました。そら私も恭の実父とあれには陰ながらたづねて居ましたが、手が、りがなく、今ではもうあきらめて居た様な訳でございます。

ことにあの子が孤独の思想にかたまつて居ますし却へつて親が今知れては、あの子の強い平和がかきみだされはしないかと思つて、強ひて求めることはいたさんだのでございます。しかしなんと云つても親と子とは当然結合するのがほんとうでございますから…………。

家 私が口を入れるのは僭越かも知れませんが、どうぞ親様とお子様とを一つにして平和な家庭を作らすとおぼしめして、どうかこの無理な御願ひを御き、入れ下さいま

す様に私からも願ひいたします。ことに御令息の母様があのために今大病で帝大病院においでになるのでございます。簡単な事情でございます。

母（無言）

大木 昨夜も病院で看護して居ますと、明日はあの子の誕生日だとうはごとの様に口走りますので、私の胸はもうえぐられる様でございます。

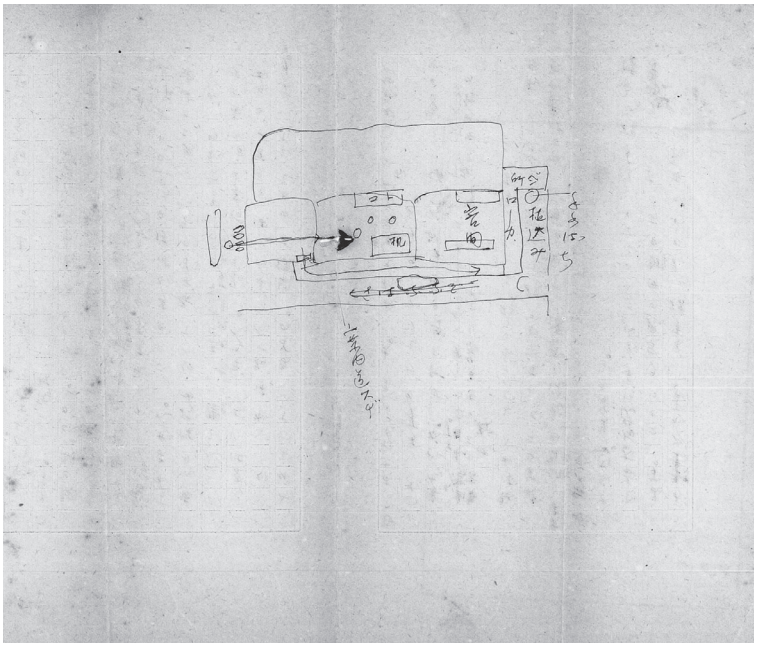
沈黙

過去のことをお葬り下さいまして、どうぞ御願ひいたします。廿代の時の無分別を今悔いて居るのでございませぬ。すからどうぞこの事を。

母 よくわかりました。母様もあなたもお二人ともおそろひでございます。結構なことでございます。しかしこれは私一人の考へではどうすることも出来はいたしません。私も廿何年の間もあれと只二人でおったものですから……充分あれの性格も知つて居ますので、今急ぐとは申されません。ことにあれは今日仕上げる大作を制作して居ますので、今こんな問題を考へさせては、折角の藝術が努力が報いられない様になるとこまりますから。え、私でも人間でございます。親と子とが結びつくなに充分努力はいたします。

沈黙

恭一があはただしく帰へつて来る。何も知らずに戸をあける。



(注)

(1) 封筒 表書きペン書きで「親子劇」とあり、さらに鉛筆で「16枚」とある。実際は18枚。

原稿 「鳩居堂原稿用紙」 13行×22字×2 赤罫 18枚

A…14枚。「一幕親子」と題が附され、右下にペンで1
→14までのノンブルが記されたもの。

B…2枚。同じ戯曲の冒頭部分。

C…2枚。右上にペンで6、7、とノンブルが記されたもの。

以上の三種に分けられる。執筆はB→Aの順。CはA執筆時の別稿(改稿)と推定される。

なお、Cの7裏には、舞台セットの略図が記されている

(画像参照)。

(2) 「ここから」「子」は「恭」になっている。

(3) 「はしり」は舞台セットの「走り込み」を指すと思われる。

(4) このあと四行分破り取られている。

(5) これ以降「大木」は「大下」となっている。

(6) 「むとめ」は「もとめ」か？

(7) 「白」は「科白」か？

(担当 棚田)

(ただ
あしき
さいた
てるよし・実践女子大学教授
あやこ・実践女子大学大学院
しょうこ・実践女子大学大学院)